

# 教職大学院 Newsletter

# No. 42

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since 2008.4

2012.4.21

## 開設4年を過ぎたの評価と課題

福井大学大学院教育学研究科長 中田 隆二

福井大学大学院教育学研究科に、既設の二専攻（学校教育専攻・教科教育専攻）に加えて教職開発専攻、いわゆる教職大学院が設置されたのは平成20年4月のことである。開設から4年間、学内関係者はもとより、学外から招聘した客員の先生方や福井県教育委員会から専任教員として派遣された先生方、その他多くの関係者方々のたゆまないご努力とご協力とによって、福井の教職大学院は全国でも注目される存在となっている。これも、県教委をはじめとする多くの関係機関・関係者のご支援・ご協力のおかげと心より感謝したい。

本専攻も、昨年度末には、教員養成評価機構による認証評価を受け、無事、教職大学院評価基準に適合しているとの認定を受けることができた。この評価結果の概評においては、次のような事項が、長所として取り上げられている。「県教委との協議のもと、公立学校との間に『拠点校』の協定を結び、当該校と教職大学院との包括的な協働関係の中、院生となった中核教員を中心に実践研究が展開されるとともに、当該専攻の複数の教員がチームとなって訪問し、教職大学院との間の密接な連携・協働体制が構築されている点」、「学校・大学で行われる実践の検討・研究の場であるカンファレンスの積み重ねを通じて、教員チームによる細かな学生支援が意図されている点」、「取組の相互点検・評価の場であり、同時に協働的なFD活動の場でもある研究会を毎週開催している点」、「県教委・学校との連携を図る教職大学院独自の運営協議会が設置されている点」など。（認証評価結果より）まさに、『拠点校』方式も含め、教職大学院の取組全体が高評価を得たと言える。

このように、全国的にも高く評価されている本専攻科の教育研究であるが、課題も見えている。その一つは、現在活動中の中央教育審議会特別部会においても、教職大学院全体の課題として指摘されていることでもあるが、例えば、「教科教育や教科の専門性を更に深めたいという現職教員学生や、教育委員会、学校現場からの要望に十分に答えきれていない部分がある。」という点である。加えて、学内的にも、開設当初から懸念されていた課題を未だに引きずっている。すなわち、『拠点校』方式という学

外での活動が主体となった新たな教育研究体制の中で、教員の負担の問題、そして教職大学院担当教員が体験して得た様々な知見や情報が、それ

以外の学部教員との間で共有されにくく、議論が進みにくいという状況である。後者については、教科教育担当の実務家教員を中心に教員のローテーションが進み、教科教育・教科専門担当教員の協力教員としての関わりも増えてきたせいか、徐々に状況も変わりつつはあるが、新たな協力関係が検討されるべきと考えている。

今まさに中教審でも、今後の教員養成そして教師教育の在り方について、修士レベル化を指向し、教職大学院の実践例を中心とした議論が進められていると聞く。これらの動きも見据えながら、福井大学大学院教育学研究科としては学内での検討を進め、教職開発専攻と学校教育専攻・教科教育専攻の三専攻が、互いに協同しつつ、そして県教委との間の様々な連携も視野に入れながら、より有効な「教員養成・教員研修システム」を構築し、提案・実行できればと考えている。教職大学院はもとより、今後の本研究科での取組について、関係者各位からのご指導・ご助言そして一層のご支援をお願いしたい。



### 内容

- 開設4年を過ぎたの評価と課題 (1)
- 認証評価 (2)
- 学位記伝達式が無事に修了しました (3)
- 平成24年度 教職大学院スタート(4)
- スタッフ紹介 (4)
- 院生紹介 (6)
- 書評 (12)

## 福井大学教職大学院は教員養成評価機構の 認証評価にて「適合認定」を受けました

教職大学院 岸野 麻衣

福井大学教職大学院は平成23年度に教員養成評価機構による認証評価を受けました。教職大学院は優れた教員養成の質の保証を図るため、学校教育法に基づいて5年ごとに第三者評価を受けることを求められており、本学は平成20年度に設置後初めての評価を受けました。評価は、他の教職大学院の教員や他県の教育委員会関係者・学校管理職経験者等の6名から構成された評価員チームが書面調査と訪問調査によって行います。6月に本学が提出した自己評価書を踏まえて、11月に訪問調査が行われ、大学での教員への聴取のほか、福井県教育委員会への聴取、拠点校の一つである福井市至民中学校での実地調査と聴取、スクールリーダー養成コースと教職専門性開発コースの在籍院生・

修了院生複数名への聴取等が行われました。委員からは、学校拠点方式のカリキュラム、院生の学びを表した長期実践報告、運営協議会等をはじめとする教育委員会や関係機関・学校との連携、教職大学院の多様な実践を多角的に広く伝えるニュースレター等について、特に高い評価を得ました。評価員チームから出された評価結果の要旨は次の通りです。詳しい評価結果の内容や本学の提出した自己評価書は、教員養成評価機構のウェブサイト (<http://www.iete.jp/>) で見ることができます。訪問調査等でご協力いただいた関係機関・関係者の皆様に心より感謝申し上げます。今後も質の高い教師教育に向けて取り組んでいきたいと思えます。

### 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

#### 認証評価結果

##### 福井大学教職大学院の評価ポイント

- ・ 教職大学院での学生や教員の協働研究の展開やそこでの学びを具体的に記載している「教職大学院ニュースレター」が年10回程度発行され、教職大学院の理念・目的及び教育研究活動の周知に努めている。
- ・ 入学試験の筆記試験では、志願者のこれまでの学習履歴や実務経験等を的確に判断できる問題が課せられており、審査基準も明確に定められている。
- ・ 学校の課題と現実に即して教職専門性を開発することを目指して、教員が学校に出向いて実施される「学校拠点」の授業（「長期実践事例研究」「長期協働実践プロジェクト」）が教育課程の中核となっている。
- ・ 公立学校、教育行政機関、附属学校園、私立高等学校と「拠点校」の協定を結んでおり、「拠点校」の教員が学生となって教職大学院で学びつつ実践研究を進めるとともに、「拠点校」が推進している実践研究を教職大学院全体で支援する協働研究体制がとられている。
- ・ 学部新卒生の実習「長期インターンシップ」は、週3回1年間にわたり「拠点校」において実施されており、実習校の教師集団に加わって教師の仕事の総体を経験し実践的に学ぶことを意図している。
- ・ 「学校拠点」の授業の各学校での状況や個々の学生の学修状況を把握し支援の方向性等を協議するための「専攻会議」、学校における実践研究の展開やそれをまとめた研究論文を報告・検討する「学校における実践を支える協働研究 CoP」と名付けられた研究会が毎週開催されている。
- ・ 対話と学習の生まれる空間としてデザインされたコラボレーション・ホールが整備・活用されており、実践研究に有効な資料も整備されている。
- ・ 教育委員会及び学校等との連携を図る教職大学院独自の「運営協議会」が設置されている。

平成24年3月29日

教員養成評価機構



## 学位記伝達式が無事に終了しました

教職大学院 森 透

去る3月23日（金）18時からコラボレーション・ホールにて平成23年度の学位記伝達式が開催されました。学部・大学院の学位記授与式は同日の昼間に開催されましたが、教職大学院は勤務しながらの大学院なので、勤務後の夜に伝達式という形で今まで開催されてきました。18時に修了生26名（教職専門性開発コース9名、スクールリーダー養成コース17名）が集まって、梅澤章男研究科長から修了証書を受け取りました。研究科長からの祝辞のあと、グループに分かれてから最初にTBS系列の取材TVの報道を全員で視聴しました。内容的には、教職大学院への好意的な取材報道でした。その後、各グループごとに食事をしながら修了生のM2の院生からM1の院生が2年間の歩みを学ぶという内容の懇談を行いました。それぞれのテーブルには教員も1名ずつ加わり、M2院生の汗と涙の苦労の足跡を共有することができました。

後半は松木専攻長のお祝いの挨拶と、この3月で



教職大学院を退職された長谷川義治先生の最終講義をお聞きしました。



4月から栃木県の高校の数学教師に着任されるという夢を描いておられる長谷川先生ですが、最終講義は小学校の算数のテーマのお話で、教師は子どもたちの算数への思いを丁寧に受け止めることが大事である、ということ強調されておられました。

この学位記伝達式は、M2院生とM1院生の世代間の継承がなされた最後の締めくくりにふさわしい会となりました。卒業された院生の皆様に改めてお祝いを申し上げたいと思います。それぞれの職場で今後とも頑張ってもらいたいと思っています。

## 平成24年度 教職大学院スタート



4月7日（土）に平成24年度教職大学院開講式がコラボレーションホールで行なわれました。今年度は教職専門性開発コースに13名、スクールリーダー養成コースに17名の院生が入学しました。また、今年度は新たに2名のスタッフを迎え、福井大学教職大学院は新たなスタートをきりました。

開講式では中田隆二研究科長、松木健一専攻長の挨拶に引き続き、オリエンテーションが行なわれました。院生は研究科長や専攻長から語られる教職大学院への期待や教師の成長を促す「語りと傾聴」についての話に熱心に耳を傾けていました。その後、2年目の院生も交えてのグループセッションが行なわれました。教職専門性開発コースの院生は既にインターンを開始していることから、インターンとしての学びや戸惑いを語り合いました。また、スクールリーダー養成コースの院生は新年度を迎えての現状や課題、そして今年度の展望等について語り合いました。非常に限られた時間ではありましたが、4月末に行なわれる合同カンファレンスへの期待が高まった開講式だったと思います。



開設5年目にあたる今年度は総勢60名の院生が校種や経験、世代を超えて学び合うこととなります。それぞれの実践の展開を共有し、互いに支え合い、学び合うことのできるコミュニティ作りに一層尽力していきたいと思っております。今年度もどうぞよろしくお願い致します。

## Staff 紹介

### 松田 通彦 まつだ みちひこ

今年度、大学院教育学研究科（教職大学院）教授として着任しました松田通彦と申します。3月末、福井県教育庁企画幹および福井県教育研究所長を最後に地方教育公務員としての務めを全うし定年退職したところであり、今般、教育行政機関から学問の府への

トラバーユということで、少なからずカルチャーショックを受けていますが、与えら



れた職責を果たすべく決意を新たにしております。

この教職大学院では、高度専門職業人としての教師の成長は、自らの実践を振り返り、省察し、そして次なる実践に結び付けるという事例研究サイクルを重要視しています。そうしたことから、まずは、自分自身の来し方を振り返ることから始めるのが筋ではありますが、私自身のそれは、高等学校、中学校、大学、県教育研究所、県教育庁および知事部局、米国留学等、多岐にわたる勤務歴、キャリアを経て今日にいたっていますので、紙面の都合上、また次の機会に譲ることにさせていただいて、ここでは、大学院での教育・研究に対する個人的な思いの一端を書き留めることで自己紹介に代えさせていただきます。

21世紀の学校教育を担うスクールリーダー・中核教員の専門的力量的開発を目的に設置された福井大学教職大学院の特筆すべき点について、私は以下のように理解しているつもりです。1つは、学校の今日的課題解決に向け、大学院の教員が直接学校に出向いて共に学校改革に取り組みながら教師の協働実践力を培っていく学校拠点方式を基本理念に掲げている点。今ひとつは、理論と実践の融合という観点から、大学の研究者教員と学校現場での経験を有する実務家教員がチームを組んで、それぞれの専門性を発揮しながら研究を行うという複数の大学教員のチームによる教育実践であるという点であります。

また、こうした特色をもつ教職大学院の存在は、今後10年間で県内の教員の三分の一が現役を退く大量退職期を迎える中、力量のある教員の育成、さらには学校全体の教育力向上が喫緊の課題になっている今日の学校現場にとって、教育支援の拠り所の1つでなければならぬとの認識を強く持っています。

一方、国においても、中教審「教員の資質能力向上特別部会」の中で、教員の養成・採用・研修制度の骨格を改め、資質能力の向上方策を総合的・一体的に進める抜本的改革の必要性が議論されています。こうした改革には、教員免許制度そのものの改革を伴いますから、当面は、採用後30数年にわたる教職生活全体を通して、研修制度の見直し・在り方の検討が急務となってきます。こうした社会的背景を踏まえつつ、次の2点について、自分なりの実践を試みたいと考えています。

1点目は、福井県教育研究所と連携した教員研修プロ

グラムの充実・強化に取り組ませていただきたい点であります。現在、教育研究所は拠点校の1つとして、教職大学院と協働し研修企画力の向上等に積極的に取り組んでいただいています。既に昨年度から、新任教頭研修の一環として、免許更新講習における双方のコラボレーションを進めていますが、今後の大きな課題は、文部科学省が検討している教員免許の修士レベル化への対応であると思っています。この3月に県教育委員会で作成された「教員研修の在り方検討会」の中でも提案されているように、教育研究所の現職研修を活用して教職大学院での取得単位に読み替えるシステムが確立されれば、全国に先駆けた教師教育の取組みにもなります。教育研究所での勤務経験を活かして、具体的モデルの枠組みづくりに参画できれば幸いです。

2点目は、県教育委員会とタイアップして、学校における校内研修の支援をさせていただきたい点であります。高度な専門職である教員が自らの資質能力を高めることのできる最大の機会は学校における日々の教育活動の中にあり、同僚間でのOJTを通して、学校の中で教員が育つ仕組みをつくるのが大切であります。この意味において、教職大学院の学校拠点方式は、本来、学校現場で教員を育てることをねらいとするものであり、このコンセプトを活かして一層充実した校内研修支援システムが構築できればと念じています。既に県でも、教育庁の指導主事が「コアティーチャー養成事業」等において、直接学校を訪問し、授業研究会を通して学校全体の教育力を向上させる取組みを推進しておられますが、今後、理論と実践の両面でその内容がさらにグレードアップするよう、県教育委員会との連携を深めて校内研修文化の確立・定着に努めたいと考えています。

学校教育の抱える課題がますます複雑化、多様化する昨今、教員に対しては今まで以上に高度な専門性と実践力、応用力が求められてきております。21世紀の知識基盤社会を生き抜く子どもたちの心知体バランスのとれた資質能力を培うことのできる教師教育、教師の生涯にわたる職能成長を支える教員研修のより望ましい在り方を求めて、微力ながら全力を傾注する所存です。どうぞよろしく願いいたします。

## 山口 真希 やまぐち まき

はじめまして。この4月より特命助教として教職大学院のスタッフに加わらせていただきました山口真希です。今後よろしく願いいたします。

着任して一週間が過ぎましたが、まだまだ分からないことだらけで、私の周りで飛び交う会話はまるで外国語のように聞こえてきます。ただ、ここ1号館の6階付近がやけに温度が高く、熱気にあふれていることだけは日々体感できています。教育に対して、これほどまでに熱く語りあう場に出会ったのは初めてです

し、じっとしていると自分がどんどん取り残されるような気持ちさえ覚えます。

私は学部時代を教育学部で過ごし、そのあと大学院で心理学を学びました。もう少し、教育について、学びについて、



まとまった時間をとって考えてみたいと思ったからです。学部生のときは、目の前に子どもがいないせいか、授業を聞いていても、学ぶ主体のことがあまりよく理解できませんでした。授業を受ける側の子どもが、どのように学び大きくなるのか、人間関係までも含めた環境との相互作用がどのように行われているのかを知りたいと思い、発達心理学を専門として研究をすることに決めました。義務教育段階の前にも、子どもたちは園や家庭生活のなかでいろいろなことを吸収しています。就学前の子どもたちがどんな風に何を学んでいるのか、これは学校教育との接続を考えるうえで重要だと思い、いまはこの発達段階の子どもたちに焦点をあてて研究を進めています。

ところで、唐突ですが、子どもはいったい数をどのように理解しているのでしょうか。生まれたばかりの赤ちゃんにも数概念があるのでしょうか。大きくなるに従い、どんな風に数概念を拡張させていくのでしょうか。生活をしているなかで自然と得られる数概念と学校教育で教えられる数概念とは、どのようにかわりあっている（かわりあうべきな）のでしょうか。…これらは、現在の私の個人的な関心テーマです。少し、研究に関連したお話をさせてください。

数とは、数量を表すために用いられる抽象的な概念です。ここにイチゴとトマトがそれぞれ1つずつあったとすると、外見的にも意味的にもそれらは互いに異なる事象ですが、それらに共通するものを見出せば、互いに「1」「1」と呼ぶことができます。それを合わせて「2」とすることも可能です。このような数概念を人間は進化の過程で獲得し、人類の歴史とともに次第に拡大させてきました。洞窟に住んでいた石器時代の人間が、やがて科学を生みだし、巨大な都市を建設するまでになったのは、何と言っても数を使えるようになったからであり、数は生活のあらゆる場面、人間の営みのすべてに関係しているといえます。

例えば、日本のようなコミュニティに暮らしてみると、朝起きてから夜寝るまでの間に、私たちは否が応でも数に触れていなければなりません。目覚まし時計が鳴る時間に起き、出かけなければならない時刻までの支度時間を見積もり、（私だったら）朝

ごはんのトーストのタイマーをしかけます。電車に乗るには切符を買い、今月の予算を念頭に置きながらスーパーで食糧品を買い。電化製品、電子機器が普及し、難しい操作を行う生活を余儀なくされています。このように明示的（自覚的）でなくとも、私たちは常に数に支配されて暮らしています。このように数に依存したコミュニティでは、学校で子どもたちに算数・数学教育を熱心に行っているように見えます。

その一方で、算数・数学教育を必ずしも前提とされない子どもたちがいます。その代表例として、知的障害のある子どもたちがいます。しばしば「知的障害のある子ども」は知的機能や抽象化の力が弱いために、数概念の獲得に困難を抱えていると言われます。そのため指導が難しく、通常のかたちで行う算数・数学教育が免除されたり、他の教科との合同でおこなわれたりするようです。ですが、「知的障害のある子ども」は本当にみな、数概念の獲得がまるごとすべて難しいのでしょうか。「知的障害のある子ども」とカテゴリーで論じると、便利な反面、問題に浮上してこないというこわさもあると感じています。

私の歳の離れた妹は知的障害があると言われていません。それは確かに、定型発達の子どものと比べると、数概念の獲得が難しいという印象は受けます。通常のテキストを用いて通常の教え方をしても分かってくれません。しかし、まったく理解できないかということ、それは違います。特別支援教育に携わっておられる先生方も感じておられることと思いますが、子どもには一人ひとりに見合った理解のしかたがあり、それはその子の生活史とリンクしています。子どもたちが何をどんな風に学んでいるのか、そこに大人はどのような手助けをしているのか…。

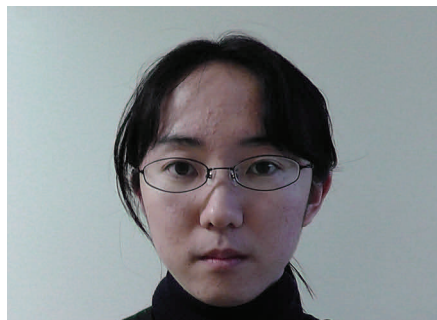
最終的には数の学びに難しさを抱えている子どもへの教育という現実的な問題に還元できる研究をしたいと思っています。その意味では、この教職大学院で現場の課題と一緒に考えさせてもらえることを、とても魅力的に思っています。恵まれたこの環境に感謝しつつ頑張りたいと思いますので、どうぞよろしくお願いたします。

## 院 生 紹 介

### 篠井 紀代美 いかだい きよみ

こんにちは。今年度、教職専門性開発コースに入学しました篠井紀代美です。担当教科は国語です。4月から福井大学教育地域科学部附属中学校にてインターンシップをさせて頂くこととなりました。附属中学校では学部三年生の時に主免教育実習をさせて頂いたり、毎年6月上旬に開かれる教育研究集会に参加させて頂いたり、これまでにも何度かお世話になっています。附属中学校には、「学P」と呼ばれる総合的な活

動の時間、各教科の「核となる学び」に沿ったカリキュラムなど、この学校ならではの特色がたくさん



あり、とても興味深い学びの場です。このような場で学ぶことができるのをとても楽しみにしています。

私は中高時代に恩師に恵まれたことがきっかけで、教師になりたいと思うようになりました。授業がとても分かりやすかったり、興味を引かれるような教材を見せて下さったり、また授業以外の場面でも真剣に向き合って下さったり。特に印象に残っているのは、中1・2年生の時の国語の先生です。私の通っていた中学校の国語の授業では、光村図書という出版社の教科書を使っていたのですが、「平家物語」では矢の見本を持ってきて見せて下さったり、「春よ、来い」という詩では、松任谷由実が歌っているCDを持ってきて聴かせて下さったり、「大人になれなかった弟たちに…」では筆者が実際に朗読しているCDを聴かせて下さったりなど、一般的な音読もしくは範読という導入の形だけではなく、その題材の特性に合わせて、また、おそらくそのクラスの生徒の理解しやすさも考慮して下さり、より効果的な教材を私たち生徒に提示して下さい、その文章に興味を持てるように工夫して下さいました。その先生の授業の魅力は教材だけでなく、説明文の授業では、黒板にマトリックスや表を描いて、文章の段落構成や主旨が視覚的に分かりやすくなるように工夫して下さいました。また、私は、(今でもややそのくらいがあるのですが)、当時はとても内向的な中学生でした。しかしその先生は、授業以外に、学校の廊下でお会いした時などにも気軽にお声をかけて下さるなど、温かく関わって下さいました。このような先生のお姿から、教師という職業に憧れ、教師になりたいと思うようになりました。そして、探求ネットワークやライフパートナーといった実践的な活動がある福井大学のカリキュラムに惹かれ、実家のある富山から福井に来ることになりました。しかし、学部時代にそれらの活動を実際に経験したことによって、また教育実習の経験を通して、自分の力量不足を痛感しました。特に教育実習では、指導案と実際の授業展開との間の大きなギャップを体験し、そこでどのように授業を進めていくか、戸惑う場面がありました。子どもたちがどのように学んでいるかをきちんと見取ることができていないということが大きな原因

だったように思います。その結果、授業のほとんどが不完全燃焼のまま終わってしまいました。また、子どもたちとの関わり方にも自信が持てなかったことから、自分自身は教師に向いていないのかもしれないという思いをずっと抱き、教師になることを諦めようかと思っていました。しかしその一方で、やはり教育実習を通して学ぶことができたものは非常に大きく、また教育実習での経験があったからこそ、「もっと子どもに学ぶ楽しみを感じてもらえるような授業をしたい」という自分の思いに気付くことができました。また、他の先生の授業などで、子どもが真剣に学びへと向かっている姿を目の当たりにすると、背筋が伸びるような思いがし、自分の至らなさに気付くだけではなく、子どもからエネルギーをもらうことができました。そのように、子どもが意欲的に取り組む場面を私も作ってあげられるようになりたい、そのような思いから、やはり教師という職業に魅力を感じ、改めて教師になりたいと強く思うようになりました。

教職大学院での2年間を過ごすに当たって、考えてみたいテーマがあります。それは「国語という教科における『専門性』とは何なのか」「良い国語の授業とは何なのか」ということです。学部時代の私はこのことについてきちんと考えることができていませんでした。一、二年の時は、ただ「グループ活動をすることで子ども同士の話し合いが促されるのではないかと漠然と考えていましたが、三年の時の教育実習での経験から、「ただ漠然とグループ活動を設定しても、それが必ずしも子どもの学びにつながっていくとは限らない」ということを学びました。そのことから、グループ活動の基盤となる学びを教師が設定していくことが大事だと思うようになりました。しかし、どのような学びを設定していけば良いのかは子どもの実態に即して考えていく必要があります、自分だけで考えていても仕方ありません。そのため、現場に伺い、実際の子どもたちと関わりながら学べるこの二年間はとても貴重なものだと感じます。

この二年間で、人としても、教師としても成長できるように頑張っていきたいと思います。よろしくお願ひします。

## 瀧波 裕美 たきなみ ひろみ

こんにちは。今年度、福井大学の教職大学院教職専門性開発コースに入学しました瀧波裕美です。3月まで山梨県にある都留文科大学に在籍し、臨床教育学を専攻して学んできました。これから、1年間は、福井市中藤小学校で長期インターンシップをさせていただきます。まだまだ、不安に思うこともたくさんありますが、久しぶりの福井ということもあり、気持ちも新たに、新鮮な気持ちでどんなことにもぶつかっていき、数多くのことを吸収し、自分の力にしていきたいと思っています。

私は学部時代、母校でもある福井市円山小学校、福井市大東中学校でそれぞれ教育実習をさせていただきました。この実習で学んだことは多く、これから教師を目指すにあたって、私のかけてになるものであったと感じています。しかし、どちらの実習も短期間のものでした。特に、中学校での実習は、たった2週間というところで、私自身、授業案作成、授業実践に時間を費や

し、生徒との時間は、あまり持てずに終わってしまいました。そのため、何か消化しきれない、悔しい思いを抱きました。授業のなかでの子どもたちとの関わりはもちろんのこと、授業外での子どもたちとの関わり的重要性も学級経営を行う上では、必要不可欠なことです。そうした、子どもと向き合う時間、子どもを理解する時間をじっくり持ちながら、学んでいきたい、と実習を振り返ることで感じるようになりました。

また、その他にも、学部時代に、学習支援ボランティア、児童相談所でのアルバイト、支援を必要とす



る地域の子どもたちとの関わりなど、様々な場面で、いろいろな子どもたちと関わってきました。学習支援ボランティアでは、TTとして教室に入り、子どもたちと接してきました。その中で、教壇に立つ教師の姿を見て、授業だけではない、子どもたちへの指導・支援の仕方というものを学ぶことが出来ました。各学校、各教師によってそれぞれカラーは異なるものの、こういう教師になりたい、ああいう教室を作りたいというのが、私の中で漠然と現れてきました。どの教師も子どもたちへの思いや願いは変わりません。しかし、それが、子どもたちに反映され、伝わっているかどうかで、教室の雰囲気も違ってきます。私自身も、いくつかの教室に入り、良くも悪くも、上手くいっている例とそうでない例を見てくる事が出来ました。これは、私がどういう実践を行えば、子どもとの信頼関係が上手く築かれ、誰もが安心して過ごせるようになるのか、安心できる居場所とはどういうものなのか、ということが気になり始めた瞬間でした。

このようにして、私が積み重ねてきた体験から、私は、卒論で「子どもたち一人ひとりが安心できる居場所づくり」について取り上げ、これまで研究してきました。今日の子どもたちのなかには、背景に様々な困難を抱えながら、過ごしている子どもがたくさんいます。そうした子どもたちの逸脱した行動のみを見て判断し、注意や叱責、圧力のみで解決しようとするのではなく、しっかりその子の背景にまで寄り添いながら、子どもがそうした行動に出た要因を考え、指導、支援していかなければなりません。人間関係体験不足や自然体験不足な子どもたちに、他者や自然と関わることの楽しさや心地よさを感じてもらえるような実践を行っていく必要があります。教師が子どもたちの表

現を丁寧に聴き、子どもたちの生活そのものを理解するとともに、子どもたちのそばで、失敗も一緒になって困り、悩む、またあるときには、励まし、応援するといった常に子どもの思いに共感し、子どもたちが安心して過ごせる学級、学校をつくっていきたくと思っています。そして、何より子どもの不安も、すべてを丸ごと受けとめてあげられる教師でありたいです。

こうした思いもあり、私は、これまでは山梨の子どもたちと多く関わって来ましたが、これからは福井の教師を目指したという思いからも、福井の子どもたちと長い時間関われ、より実践的に学ぶことの出来る、福井大学の教職大学院を志願しました。福井の子どもたちの実態を知るとともに、福井の優れた教師の方々の実践から、多くのことを学び、それらを吸収し、自分のものにし、今自分の中にある漠然とした思いを確信に変え、自信へと繋げていきたいと思っています。

そして、これまで話しに聞くことはあっても、実際に体感することのなかった、教師の仕事の総体というものを見て、聞いて、感じて、自らもそれらをこなしていく中で、「教師」というものについて改めて考えていけたらいいと思っています。さらに、カンファレンスというみんなで思いを共有できる機会を有効に活用して、様々な人の意見も聞きながら、日々精進していきたいです。

これから、2年間、子どもを理解することを大切にしながら、子どもたちと関わっていきたくと思っています。また、教師としても、私が今抱えている不安を自信へと変化させ、強い期待と希望を持って、教師の一步を踏み出していけるような充実した2年間にしたいと思っています。

## 木子 泰宏 きこ やすひろ

はじめまして、こんにちは。今年度福井大学教職大学院教職専門性開発コースに入学した木子泰宏です。担当教科は数学です。これから一年間、福井大学教育地域科学部附属小学校でインターンシップをさせていただくことになりました。私の第一希望である附属小学校でインターンシップができることを非常に嬉しく思います。早速、先日行われた職員会議に参加させていただきましたが、効率や雰囲気も良く、終始和やかで私たちも参加しやすいものでした。また、会議に参加することで学生ではなく、教師としてインターンに参加しているということを実感しました。不安はありますが、まずは自分ができることを一つずつ頑張っていきたいと思っています。

私は小学校のときから教師になりたいと考えていました。特にきっかけがあった訳ではなく漠然と教師になりたいという想いがありました。高校生になってもその想いは変わらず、福井県の教員採用試験に強い福井大学に進学しました。福井大学に入学後、当時中学校二年生の不登校の男の子とライフパートナーで接する機会があり、勉強を教えたり、付き添い登校をしたり等の支援を行いました。最初のほうこそ、学校へ行くのを頑なに拒否していたA君でしたが、活動が進むにつれて積極的に学校に行くようになり、最終的にはクラスメイトのみんなと一緒に、卒業式に参加することもできました。学校に行くのを嫌がっていたA君が、

「卒業式はみんなと一緒にいたい。」と言ってくれた時は本当に嬉しかったです。ライフパートナーとしてA君の成長を間近で見守ることができ、私は子どもの成長にかかわることのできる教師になりたいという思いをより一層強くしました。

三年生の教育実習では「臨機応変」という目的を持って授業をしましたが、指導案の通りに進めるのが精一杯で目的とは程遠い授業になってしまいました。自身に余裕がなかったために、授業が一方的なものになってしまい、子どものことをおろそかにしてしまいがちでした。

インターンシップでは子どもの表情やつぶやきなどの細かな変化を見逃さずに、良い意見は全体の場に取り上げる等、子ども主体の授業ができたらと考えています。

私は教育実習などでそれなりの授業回数をこなしましたが、まだ実際に現場で授業をやっていく自信がありません。指導案の中身はもちろんのこと、それを基にして臨機応変に授業を進めていくスキルが足りてい





ないと感じています。そこで、インターンシップを通してたくさんの授業を実践し、授業作りのスキルアップを目指したいと考えています。インターンシップでは週に3日間だけ学校に行けば良いため、残りの曜日を授業の準備や反省をする時間に充てることができ、十分な時間を確保することができます。指導案をしっかりと練って、授業が終わった後は振り返り、反省し一つ一つの授業をより良いものにしていきたいです。

また、教職大学院のインターンシップは、講師などよりきめ細かい指導を受けることができ、未だ教師として現場に出てやっていく自信のない私にとっては、自信をつける絶好の機会となります。そして教育実習とは違い、インターンシップは一年を通してのことな

ので、短い期間ではわからなかった現場の苦労や喜びなどを知ることができ、改めて自分が教師に向いているのかどうかを確認できる機会にもなります。講師などとは違う「学生」としての身分を利用して、児童とのかかわり方や学級作り等、わからないことがあれば現場の先生方に積極的に聞くようにしていきたいです。

つい先日大学を卒業したばかりで、まだまだ至らない点やわからないことも多いですが、現職の先生方から少しでも多くのことを学び、試行錯誤しながら教師として成長していきたいです。皆さまこれからどうぞよろしくお願いいたします。

## 後藤 歩実 ごとう あゆみ

こんにちは。福井大学の教職大学院教職専門性開発コースに入学した後藤歩実です。4月からは中藤小学校の特別支援学級「なかふじルーム」でインターンシップさせていただくことになりました。

この文章を書いている今日、福井大学の入学式がありました。教職大学院のインターンシップは4月2日の第1回職員会議から始まっています。中藤小学校も今日入学式なので子どもたちには会っていませんが、中藤小学校の先生方とお話したり「なかふじルーム」の教室を見たりすると少しずつ「始まる」実感がわいてきます。今は「1日の流れはどのようになるのだろう」「交流学习はどのように行われるのだろう」「学年の異なる子どもたちとどんな授業ができるのだろう」と学校が始まること、子どもたちに会うことがとても楽しみで待ち遠しい気持ちでいっぱいです。

私が特別支援教育に興味をもつきっかけとなったのは、学部生の時のライフパートナー事業でのA君との出会いです。A君はADHDと診断されており、通常学級の中でA君の立ち歩きや突発的な発言が目立っていました。かかわり始めた当初、私はA君のそのような「問題」行動に対して注意することしかできませんでした。しかしながら1年、2年と活動を重ねるとA君が何の前触れもなく立ち歩いたり、突発的な発言をしたりといった「問題」となる行動をおこすのではないということが見えてきました。私がA君の行動を「問題」行動として捉える以前には、必ずきっかけとなる出来事やこのままの状況ではA君にとって苦しいことがあったのです。そのことに気付いたとき、今までの自分のかかわりがとても恥ずかしく、A君に対して申し訳ない気持ちになりました。

## 堀江 春那 ほりえ はるな

今年度、教職大学院教職開発専攻に入学しました堀江春那です。専門は特別支援です。これから1年間、福井県立福井東養護学校で長期インターンシップをさせていただくことになりました。この大学院の整った環境を最大限に生かし、精一杯学んでいきたいと思っています。

高校生の頃、「一人の子どもに深くかかわっていける仕事がしたい」と考えていた私は、ある特別支援学

部での探求ネットワーク、小中学校と特別支援学校の実習、そしてA君やA君のクラスの子もたちとのかかわりといった経験を経て、私は子ども

たちの表情や発言、行動だけでなく気持ちや体調、置かれている環境も含めて「子どもを見る」ということの重要性に気付くことができました。今はまだその視点を持ただけであり、そのための支援や指導法については、まだまだ知識も経験もありません。教職大学院のインターンシップでは特別支援学級に入ることになったので、学部生の時に学びきれなかった「特別支援」についてしっかりと学びたいと思います。

これまで特別支援学級へは見学程度しか行ったことがなかったこと、過去の先輩方にもインターンで特別支援学級に行かれている方がいないということで不安も多くあります。しかし、教職大学院は、教授やインターン先の先生方、現職の先生方、先輩方など多くの人と語り会い、悩みを共有し解決する機会や学びをより深める機会が整えられています。1年生ということで、そういった場でも自分の失敗や悩みをさらけ出して、「学ぶ」立場の者として、現場の技を、知識を食欲に吸収していきたいと思っています。2年間どうぞよろしくお願いいたします。



し先生方は子どもたちのちょっとした動きや表情から、子どもたちの意思をしっかりと受けとり温かく答えていました。子どもたちの楽しそうな、満足そうな表情は今でも忘れられません。たった1日の体験でしたが、この時から、私は子どもの生き生きとした表情を引き出す特別支援の教師を志しています。

学部時代は、探求ネットワークやライフパートナー、教育実習など、様々な実践の場をいただき、多くの子どもたちとかがわりました。いずれも素晴らしい先生方、仲間、恵まれた環境の中、真剣に子どもに向き合うことができました。その中でも特に印象深かったのは附属特別支援学校での1ヶ月間の教育実習です。実習では3人の実習生が6人の子どものクラスに入り、私はある男児の担当になりました。はじめは、すぐパニックになったり話しかけても反応がなかったりする男児とうまくコミュニケーションがとれず、一緒に遊ぶこともできませんでした。しかし、次第に自分が遊ぶ男児を「観察」していること、自分の狭い基準の中の遊びに引きこもうとしていることに気づき、「子どもの遊びに私が寄り添っていこう」と考え、かかわるようになりました。すると、実習が終わるころには、男児自ら私を遊びの中に引きこんでくれるようになりました。そのことが非常にうれしく感じたと同時に、そこで教育実習が終わることが残念で仕方がありませんでした。「打ち解けたところで終わってしまい、何も指導といえることをできなかった」という思いが残り、「今、自分が教師になったところで子どもたちに何か伝えられるだろうか」と考えるようになりました。

その疑問を持ったまま、私は学部4回生で楽集クラブ391という活動に学生スタッフとして参加することになりました。楽集クラブ391とは、学習や人のかかわりなどに困難を感じている児童生徒を対象にした福井大学の取り組みで、子どもの学習や社会性を身につける支援をするため、週1回の活動をしています。私はここ

である男児のパートナーとなり、活動中男児のそばにいたり活動後に男児の様子を記録したりしていました。男児ははじめ、他の子どものいる場に行くことができず、個別の部屋で2、3人の学生と遊んでいました。しかし少しずつ他の子どもともかかわったり活動に参加したりするようになっていきました。学生とは違い、自分に合わせてくれない同年代の子とかがわることは、男児にとって不安も大きく、うまくいかないこともありましたが、学生には見せないような楽しそうな、生き生きとした表情をすることが格段に増えました。その様子を見ていて、子ども同士のつながりの中で得られるものは、大人と子どものつながりで得られるものよりもずっと多いのではないかと感じました。そして、そんな子ども同士のつながりがうまく作れない、集団にうまく入ることができない子どもたちを、どう大人が支援していけば集団に入っていけるのかと考えていきました。

私は福井県立福井東養護学校で、知的障害と肢体不自由など2つの障害を合わせ持つ重複障害のコース、高等部のクラスに入り、学ばせていただくことになりました。重複障害をもつ子どもとはこれまで接した経験が少なく、どんなかかわりをすればいいのか全く予想が付きません。それだけに環境づくりやかかわりの仕方、授業展開、さらには健康管理に関する事など学ぶことは際限がないだろうとワクワクしています。また、学部での学びと区別して考えるのではなく、学部の時に得た「子ども同士のつながり」「集団」など自分なりの視点も、教職大学院での学びにつなげていけたらと考えています。そして、自分が教師としてどう在りたいか、かかわる子どもたちにどんなことを伝えていきたいのか、そしてどのような支援が子どもの生き生きとした表情につながっていくのかを、先生方や自分のかかわりを省察することを通して探求していきたいと思います。どうかよろしく願います。

## 小川 駿也 おがわ しゅんや

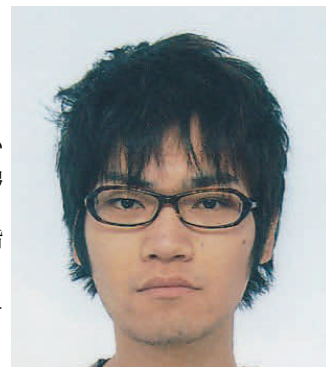
はじめまして。今年度、教職大学院教職専門性開発コースに入学した、小川駿也です。専門教科は社会科で、卒業研究は社会科教育学、特に歴史授業の在り方についてやらせて頂きました。1年間のインターンシップは、福井大学教育地域科学部附属中学校にお世話になります。

私は、福井大学の学校教育課程社会系教育コース出身で、中学校の教員を目指しており、インターン先の附属中学校は、4週間の主免実習校でした。このたび、再び同校にお世話になることが決定し、また、偶然にも当時配属されたクラスの生徒が、今年度、最高学年として在籍しているので、彼らの成長具合も個人的に楽しみです。

ところで、私自身が教師を志したのは高校生の時で、当時の副担任であり、日本史担当の先生に対する漠然とした憧れからでした。当時の私は、普通科の高校で大学に進学することだけを目指していました。つまり、自分自身の将来像が明確でなく、特に何がしたいわけでもなく、漫然と日々を送っていました。ところが、上述の先生の授業や学級における振る舞いを見ている中で、「先生ってカッコいいな」、「あんな

風に教えてみたい」という思いが、沸々と内に湧いてきました。そして、私は地元で教師を目指し、福井大学に入学しました。ところが、大学に入学した当初の私は、「ここを教えない」、

「こうしていきたい」と自己満足的な考え方に終始し、子どものことなど、ほとんど考えたことはありませんでした。また、多少なりとも「自分が実際の子どもを相手に教えることなどできるのだろうか。」と、大きな不安を抱え、どうすればいいのか分からなくなっており、大学入学当初の勢いは、なくなりつつありました。しかし、その後、教育実習やライフパートナー、その他多様な授業を通して、教師としての情熱や専門性、そして、自分自身が教師になって何がしたいのか、どんな教師を目指したいのかというヴィジョンをクリアにしていくことなどの重要性に気がきました。特に、公立の小学校における副免教育実習では、2週間という短い時間ではありますが、児童と多様な場



面で楽しい時間を共有することができ、再び教師に対する熱い思いが湧きあがってきました。もちろん、まだまだ私には、上述のような教師としての情熱や専門性が備わっている、ヴィジョンを見通せているとは言えませんが、このインターンシップで、実践を重ねながら探究し、自分なりの答えを見出せるように努めていきたいです。

また、この教職大学院に入学する直前、私は同大学院のラウンド・テーブルに参加させて頂きました。私は、今ラウンド・テーブルから設置されたZone Dの「教科」に参加し、自分自身の専門教科である社会科を教える意味や存在意義を、多様な方々との話し合いを通して共有し、多角的・多面的に深めることができました。私は、小学校以来日本史が好きなのですが、日本史に限らず、社会科は学習指導要領に見られる公的資質の育成という目標にも関わらず、依然として暗記科目としての認識が強く、私の高校時代には世界史未履修問題などもあり、入試との兼ね合いも大きいことが、課題として挙げられると思います。それは、日本史で言えば、教師や教科書の歴史解釈を子どもが受動的に受け入れ、何の批判的思考や歴史認識形成をすることもなく、単純に入試に必要な歴史用語として

数を覚えていくという作業的なものであるということでした。私も、大学に入学するまでは、それを自然なこととして受け入れていました。しかし、日本史に限らず、社会科の本質を学んでいくうちに、従来の在り方から脱却し、新しい社会科授業の在り方を模索していくことの必要性を、強く意識するようになりました。インターンシップをさせて頂く附属中学校も、当然高校入試というものを意識していないわけではないと思います。しかし、その中でも探究的な実践を展開していることは、私自身、主免教育実習などで強く感じましたし、そのような探究し省察し続けることの重要性は、この教職大学院の学びの本質でもないかと思いました。したがって、私も、インターンシップを通して、社会科を教える意味や存在意義を探究し、自分自身が納得できよう社会科の授業実践を目指していきたいです。

インターンシップ事前説明会では、大学の先生から、インターンの学生は「学生」ではなく、「戦力」として学校側から期待されているという旨のお話がありました。その期待に応えられるよう、泥臭く、一生懸命取り組んでいきたいです。これからの2年間、よろしく申し上げます。

## 中村 諒 なかむら りょう

はじめまして、福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻に本年度から入学いたしました、中村諒と申します。これからどうぞ2年間もしくはそれ以上の時間を過ごしていけますよう、よろしく願いいたします。

私のことを簡単に紹介させていただきますと、生まれ育ちは神奈川県横須賀市という少し荒れた町で育ち、自身が中学時代激しい反抗期を迎えていたときの先生方の対応や学校組織の在り方に疑問を持ったことから、教育事情に関心を持つようになりました。そんな中で「ヤンキー母校に生きる」や「夜回り先生」「GTO」などが大好きになり、教育への関心がより高まり教員の道を志すことになりました。当初はそんな単純な理由でしたが、子どもが内面的に思っていることをうまく表現できない中学時代に、おかしな行動や暴言を吐いてしまうことがあると思います。その際に行動だけを見て教員が罰則や制裁を加えることに大きな違和感や問題意識を感じました。もちろん教員の方も罰したいと思ってしまうような行動に移っているとは思いますが、子どもの内面を気にかけ、エンパワーメントしていくような教育の在り方に関心を抱き、教師の道へと進んでおります。

大学へは環境を一新して、関西の文化の中で教員を目指したいと思い、兵庫県の大学へ入学いたしました。学部時代では、社会起業学科という特色の強い学科に入学し、あらゆる社会問題（貧困・ジェンダー論・人種差別）を抱える社会的マイノリティと呼ばれる人や問題に対し、ボランティアという方法だけでなく、ビジネスを利用した継続的な問題解決型事業の企画・運営に携わってきました。簡単に説明するとフィリピンの先住民族の地域へ調査を行ったり、滞日外国人の就労支援事業としてカフェを運営したりと様々なフィールドや立場にある人と交流する機会が多く、学ぶことの多かった学部であり活動でした。教育の分野

においてもそういった、なかなか目の当りすることのない様々な立場の人や環境や価値観といったことを認め合える学びを授業や教育活動の中で取り組んでいきたいと思っております。

本研究科では、教師の総体を学ぶとともに、社会科教員としての教科の力を育み、教科を指導する表現方法を豊かにし、本質的な学びを子どもたちが得るためにはどうすべきかを研究していきたいと思っております。現在就職活動等で求められ方や評価基準というのは、最終学歴はある程度見られるとしても、自己で表現する力・判断する力・相互関係を築いていく力・行動力など一人で生き抜いていく力にあると考えますし、自営業及び社会を生き抜く中で必要とされる力は知識注入型では学べないところにあると考えます。そういった意味でも至民中が採用している課題解決型授業や異学年型教科センター方式などは正にその力を育むものとして有効な方法だとも感じております。自身も一教員として現場で活かせるような教科だけでなく、子ども一人一人の個性を高めていくような授業・学外活動・校内活動といった力を総合的に育ませていただきたいと思っております。

他にもインクルーシブ教育に大変関心があり、それを具体的に学校組織の中でどう取り入れていくのかといったことも本格的に探究していきたいと思っております。障害者や社会的マイノリティと呼ばれる人たちといった子どもを学校側に合わせるのではなく、学校が柔軟に受け入れていく仕組みをこれから考えていきたいと思っております。生徒指導に関しても一方的



な指導方式ではなく、こどもの内面から変えていくような本質的な指導の在り方など、探究したいことに満ち溢れております。

至民中では、クラスター制や課題解決型授業の意味あいなどを探究させていただくとともに、子ども一人一人の成長の変化やまた自分の変化を感じていけたらと思います。子どもを学校の規則に合わせる指導ではなく、子どもの個性や考えを一度受け止め、それに対して学校と子どもがwin-winの関係になるような働きかけを考えていきたいとも思っております。とにかくやりたいことや思いがありすぎて、パニックしています。

しかし、本音を言うと、大学時代が教育学部で無かったことや受験を経験したことがないこと、私学で

育ったことなど、教育知識の乏しさや教科力の薄さ等、自身が教員として何かを教えるレベルにないことを自負しております。その不安や何をどうスタートしていいかといったインターンへの不安もあり、さらには福井にまず慣れていない、たまに言葉がわからない、研究したいのに努力の矛先がわからず時間だけが過ぎていくといった状況で現在大分焦っているところです。しかしこれを気づけたことだけでも学びだと受け止め、その不安や力量不足に対して、これから2年間でどこまで行動へと向かうことができるのかという自分自身の成長も目指していきたいと思っております。もちろん子どもたちの成長に携わるのが一番ですが、これからの2年間どうか、よろしく願い申し上げます。

## 書評

伊那市立伊那小学校

### 『共に学び共に生きる ①・②』

①伊那小教育の軌跡 ②伊那小教師の物語

教育が、理性を持った自律的な個の育成を目指して行われることに何の疑いもないのだが、伊那小学校の子どもたちを見てみると、このような「近代的な個」とは幾分異なったニュアンスを感じるとうことがある。「はか/なさ」を知っている安堵感というか、軽やかさ、たくましさのようなものを感じるのである。個人の力では、はかる（「測る」「計る」「図る」「諮る」「謀る」）ことのできないことがあることを、活動の中で体験的に理解しているような人の在り方である。動物を飼えば、思いに反して別れや生き死に直面する。作物だって思うようには育たないばかりか、大切に思っているでも最後は食べてしまう。そしてまた、それが美味しい。そのような感覚である。

無常を語る唐木順三が伊那小教育にいきている。無常をつきつめた先に、無常が反転して自然と合一し、融解して還元した姿を、唐木は伊那小学校の子どもたちの中に見ていたのではないか。子どもたちは総合学習の中で直感している。生きていくためには、他の生

物の命を貫かなければならず、自分一人では何もできないちっぽけな存在であることをよくよく心得ている。理性を武器に明晰に自己を主張する「近代的な個」を育てる教育が、忘れかけていた鈍いが太くてずっしりした「主体性」を育てる教育が、伊那には息づいている。

伊那小学校が本を著すのは30年ぶりである。この間に世界は一段とグローバル化し、一国ではどうすることもできない行き詰まり感の中で、泥沼の経済不況や自然災害が多発している。まずは教育から立て直すことなのであろう。骨太の「主体性」を育てる教育、それは時代の要請なのである。伊那小の本は著すべくして著された。そんな気がしてならない。（松木健一）



### Schedule

5/14 mon 平成24年度 第1回 運営協議会  
5/26 sat 5月合同カンファレンス（予備日）

5/19 sat 5月合同カンファレンス

#### [編集後記]

新年度、新たなスタッフと院生を迎え、教職大学院はまた新たなスタートをきりました。教師教育改革の大きなうねりの中で、今、教職大学院はこれまでの成果を改めて問われています。

開設5年目となる今年、教職大学院はこれまでの歩みを改めて振り返るとともに、さらなる飛躍をめざして着実に歩みを進めていきたいと思っております。

今年度もどうぞよろしくお願い致します。（笹原）

## 教職大学院Newsletter No.42

2012.4.21発行

2012.4.21印刷

編集・発行・印刷  
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻  
教職大学院Newsletter 編集委員会  
〒910-8507 福井市文京3-9-1  
dpdtfukui@yahoo.co.jp











